

森鷗外『舞姫』のリアル

2010年11月20日(土)

*昨日NHKハイビジョンで「森鷗外の恋人。120年後の真実」を放送していました。今日その録画を見て、『舞姫』のモデルとなった女性の詳細を知ることができました。彼女の生年月日1872年12月16日だけでなく、ザクセン州の教会アーカイブで調べた結果、出生時間が夜の8時であり、場所がマグデブルクということまで判明しました。これでホロスコープができます。

鷗外は陸軍省軍医として国費でドイツに留学しました。22歳の彼は1884年(明治17年)8月に日本を船で立ち、同年10月にドイツ到着。ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘンと移動し、1887年4月にベルリンに来ます。衛生学を学びにドイツへ来た鷗外ですが、25歳の青年として恋愛もした。相手は当時15歳の緑色の瞳のドイツ人少女アンナ・ベルタ・ルイーゼ・ヴィーゲルト(Anna Bertha Luise Wiegert)(関西大学教授植木哲氏の調査による)。仕立て屋の娘です。彼女の母親Luise Knippelは1878年彼女が5歳の時に亡くなっている。鷗外は1888年(明治21年)7月に帰国しますが、彼女と結婚するつもりで、自分の船より4日後横浜到着予定の、別便の船に乗せて日本に向かわせる。当時陸軍士官は国際結婚を許されておらず、結婚すれば解職されるかもしれなかったのですが、鷗外は陸軍省を説得す

るつもりだったらしい。彼は1888年7月5日、アンハルター駅を出発する。そしてロンドン、パリを経由して（7月27日）、マルセーユから日本へ向かう。ルイーゼ・ヴィーゲルトは7月25日午後2時40分、ブレーメンの港からドイツ船ブラウンシュヴァイク号にエリーゼ・ヴィーゲルト（Elise Wiegert）の名前で乗船する（2時40分は満潮の時間。水門のある運河から出るため満潮時に出航する）。当時ドイツ人は出国するときパスポートは不要であり、未成年も乗れ、名前も申告するだけで良かった。ヴィーゲルト家は3ヶ月ほど前にアパートを遺産として相続していたので、旅費も工面できた。乗船名簿の「エリーゼ」は鷗外と会っているときの愛称だったかもしれないという。

鷗外の遺品にRとMの頭文字のモノグラムの入った型金がある。鷗外はこれについて何も書かなかった。しかし、これはルイーゼが鷗外に贈ったハンカチ入れの刺繍のための型であった。重なったRとMの上に、判読しがたい模様のようなものがある。そこに彼女の名前の頭文字、A、B、L、Wが巧みに入っていることをかつて鷗外番組を担当したディレクター今野勉氏が発見した。このようなハンカチ入れは婚約者に贈る品であるという。

鷗外の船は1888年9月8日に横浜に到着。その4日後の9月12日に横浜に到着したルイーゼを鷗外は築地精養軒に宿泊させる。そして母の森峰子（父は養子のた

め、御典医の家系である森家の実権は母親がもっていた)を説得しようとするが、こ
とは思惑通りに進まなかった。母を選ぶか、女を選ぶかと迫られる。結局森家はルイ
ーゼに帰国するための金を用意し、10月17日ドイツへ向かう船に乗せる。

遠い日本に単身やってきた15歳の少女を待っていたのは結婚ではなく、別れだっ
た。

外国人と結婚したら軍医の道は閉ざされ、御典医の家業は途絶えることになる。母
親はそのことで大反対したのでしょう。はるばる日本にやってきた少女の愛は、日本
の家制度や男の出世の道といったものに阻まれ、なかったことにされてしまったので
す。彼女の身の上を思えば、ひどいことです。鷗外を愛に不実だと責めることもでき
ます。しかし時代がいまだ自由な国際結婚を難しくさせるような頃だったということ
もあるでしょう。彼も一生彼女を忘れなかった節があり、これも成就することがない
悲恋の一つの形かと思えます。2人の相性を見ればすぐ分かると思いますが。

ルイーゼが日本をたった4ヵ月後の1889年(明治22年)3月、鷗外は以前か
ら縁談があった赤松男爵の娘登志子と結婚させられ、上野池之端の赤松家の持家に移
り住む。翌年の1890年(明治23年)1月、鷗外は処女作『舞姫』を発表(「国民
之友」明治23年1月号の付録として)、ルイーゼへの想いを作品に注ぎ込む。鷗外の
文学への歩みが始まる。同年4月に長男於菟(オットー)が生まれるが、鷗外はその

直後家を出て二度と戻らず、登志子とは離婚する。いやいやの結婚であったなら最初からしなければ良かったと思うのは、当事者でない人間の感想でしょうか。

12年後の1902年1月に大審院判事の娘、荒木志げと再婚。翌年長女茉莉（マリー）が生まれる。1907年次男不律（フリッツ。翌年死亡）、1909年次女杏奴（アンヌ）、1911年三男類（ルイ）が生まれる。次女の名前アンヌと三男のルイの名前は、アンナ・ベルタ・ルイーゼ・ヴィーゲルトのファーストネームとサードネームからとったと思われる。かつての恋人の名前を自分の子供につける心情は計り難いですが、恋人の名前を自分の腕に入れ墨して永遠化する行為に似ているようにも思えます。

鷗外は文豪と称される文学的活動をする一方、軍医総監まで上りつめる。そして死ぬ間際、ルイーゼ関係のものを集め焼却させる。終生心の中で大切にしてきたものは、死後、他人の目にさらしたくなかったのでしょうか。

一方のルイーゼは帰国後、20歳の時にガラス職人と結婚する。自分の所有するアパート内にガラス工房を作る。そして1951年79歳で死去。晩年を一緒に過ごした孫のハインツ・ケーター、ゲルハルト・ケーター兄弟（1934年、35年生ま

れ)によると、彼らの祖母が日本に行ったとか、日本人の恋人がいたとかの話は聞いたことがないという。またルイーゼという名しか知らず、アンナ・ベルタの名があることは全く知らなかった。祖母は心臓は多少弱かったが病いがちということはなかったという。ルイーゼは青春時代の心の傷をどのように感じていたのでしょうか。

鷗外とルイーゼの相性は調べなくてもおよそ見当がつきます。恋愛の相と、破綻の相があるはず。ルイーゼは出生時間・場所まで分かっていますから、彼女の人生を追うこともできます。

何世紀にもわたる世界の歴史の中で、語られなかった多くの悲恋がこれまでいくつあったことでしょう。そのひとつひとつに愛の喜びと、心を引き裂かれる苦悩があったわけです。それはふつう想像するしかありません。でも、生年月日と出生時間が分かっているこのケースでは、その喜びや、苦悩の深さまで分かると思います。その恋愛の体験を、星の位置で追うことができる。

しかし、それがいったい何になるのだとも思います。既に清浄な世界にいる彼女の魂の、地上での煩悩をあばくことが何になるのだと。

今日はずっと鷗外の恋人に思いを馳せていました。

2010年11月21日(日)

ルイーゼのホロスコープを作ってみました。利発で、情愛も深い。異性をひきつける相もあるが、良い結果を生まない。リズム感があり、直感力もある。案外人前に出ることが平気だし、積極的。体調は変わりやすい。

鷗外との相性は、精神的に合う(太陽同士が約60度)。恋愛感情に関しては、感情は強いが困難を伴う(彼女の火星と彼の金星が150.45度と、ほぼ150度)。友情運がある(彼女の月と彼の金星が120度に近い)。

もっと多くの恋愛の相や破綻の相を予想していましたが、それほどではなかった。困難な恋愛の強い相はひとつありますが。

彼女の性格が積極的・行動的と出たのは、単身、日本まで来たことと合致しています。利発で感情も豊か、恐らく音楽性もあった。鷗外は彼女のそんなところに惹かれたのだと思います。

鷗外は1887年4月にベルリンに来ましたが、仕立て屋の娘と知り合う機会があったら、服の仕立てで店に寄ったときでしょうか。二人が初めて出会った可能性があるのは4月では1887年4月26日です。もっと後の可能性もありますが、調べていません。